

ハンナ・アーレントの「出生性」概念をめぐる近年の先行研究について

伊藤 孟

A review of several recent studies on Hannah Arendt's concept of "natality"

ITO Takeshi

はじめに

ハンナ・アーレントの「出生性 (natality)」概念は、解釈が難しく、かつてはジェイによる「出生」とその現実化としての「誕生 (birth)」を混同した解釈と、それに基づく批判 (Jay 1985: 252) にみられるように様々な解釈の混乱を生んできた。しかし、近年は、(Totschnig 2017) における整合的解釈の試みや、(Söderbäck 2020) におけるフェミニズムの文脈による解釈など、様々な可能性に満ちた「出生性」についての解釈が行われている。

本稿ではアーレントの「出生性」概念をめぐる近年の先行研究についてのレビューを行うことで、アーレント思想における「出生性」のポテンシャルを探るとともに、それらの解釈の問題点と残されている課題を明らかにしたい。先行研究におけるアーレントの「出生性」の位置づけは大別すると以下の通りとなる。

第一に、全体主義や「死の政治の概念 (the “thanatopolitical” concept)」(Vatter 2006: 145) に対する抵抗概念としての位置づけとして、「出生性」をとらえるもの。つまり、アーレントの「出生性」を、全体主義や(フーコーの指摘する)現代の生政治における「生命の管理」に対する防波堤として肯定的に評価する研究である。例えば、Vatter は、アーレントの政治思想が「生命に対する完全な支配を達成しようとする全体主義的プロジェクトに対して、生命の中の何が抵抗を示すのかを特定する」(Vatter 2006: 137) ものであり、「出生性」は「剥き出しの生 (bare life)」に対抗する政治的な議論であると主張する。

Demiryol も同様に、全体主義が人間の「活動 (action)」と複数性を消し去ろうとする体制であるのに対し、アーレントはそれへの応答として「出生性という還元不可能な人間の条件の中に、人間の自由の可能性を確固たるものとして据えたのである」(Demiryol 2023: 124) と指摘している。また (Diprose & Ziarek 2018) は、アーレントによる全体主義への批判が、

「生政治がどのようにして人間の存在や関係性、政治的共同体から出生性を抑圧し、極端な場合には排除するのか」という分析に等しいと述べている (Diprose & Ziarek 2018: 9)。

(森川 2010) においても「活動」の時間的な様式は、その行為の「目的=終わり end」が作品を世界に出現させる「瞬間」に集約させる「制作」とも一定の方向へと運動を続ける「過程」に従う「労働」とも異なり、「出生」を通じて唯一独自の個人が次々と世界に現れ出ることで複数の人々が構成する世界が絶えざる変容を被りながらも持続してゆくように、新たに挿入される無数の始まりの「瞬間」によって変化しながら継続してゆく「過程」として理解されるのでなければならない」(森川 2010: 283) と述べられ、「出生性」がもたらす「始まり (beginning)」に力点を置き、その「始まり」が政治的な営みである「活動」を始動させ、政治空間を形作ることを強調し、それが全体主義に抗するであると解釈される。

第二に、生物学的誕生と政治的行為の結びつき、およびフェミニズムからの批判とその視座から「出生性」を「誕生」と結びつけて拡張しようとする議論も盛んに行われている。「出生性」が抽象的であるとする批判や、それを実際の「出産」や女性の自己決定権と結びつけて再評価しようとする議論である。

(Söderbäck 2020) では、カヴァレロの議論を引き、「アーレントの出生性に関する3つの批判的懸念、すなわち、奇妙に抽象的であること、問題となるほど身体性を欠き、性的に中立であること、そして非対称性よりも平等を前提とする脆弱性のモデルに依存していること」(Söderbäck 2020: 273) を挙げ、「出生性」を具現化する母子の身体的・非対称な関係性の欠落を批判している。一方で、前述した (Diprose & Ziarek 2018) では、政治的行為における「出生性」が、「人間の誕生という第一義的な事象に関する女性の相互関係における主体性が認められ守られること」(Diprose & Ziarek 2018: 25) に依存していると論じられ、妊娠や中絶といった再生産の自己決定の文脈へと「出生性」が拡張されている。これに対して、(Totschnig 2017) では、アーレントの「始める能力は出生性に根ざしている」という主張の曖昧さを解くため、「出生性」とは出産の生物学的プロセスそのものではなく、「人間関係の網の目への新来者の到来 (the arrival of newcomers in the web of human relationships)」を意味すると解釈されている (Totschnig 2017: 341-342)。

第三に「出生性」を用いてこれまでの哲学における死への偏重に対する批判し、伝統や有限性の再構築を目指す論文が見られる。ハイデガーの「死への存在」に代表されるような死を特権化する哲学への対抗として、人間の有限性や歴史性を「出生性」から捉え直す議論も重要な傾向である。(O'Byrne 2010) では、ハイデガーが「私たちの有限性を最初から、そして大部分において死すべき有限性としてアプローチする」ことで、「哲学における死を愛好する伝統の中に身を置き、時間の中での私たちの存在を未来へと方向づけた」(O'Byrne 2010: 4) と述べた上で、哲学史において、誕生が単に身体的で自然的な出来事であり、哲学的考察の適切な対象ではないと見なされがちであった、と述べられる (O'Byrne 2010: 8)。

(Ferguson 2022) では、「出生性」が解放的であると同時に解釈学的に根差していると述べ

られ (Ferguson 2022: 119)、「出生性」の中心には「先行するもの」と「前例のない新しさ」という未解決の緊張関係が含まれていることが示されている (Ferguson 2022: 123)。

さらに、(青木 2021) では、アーレントにおいて人々の生が死と誕生という両端から捉えられ、「出生性」が「可死性」と一對のものとして有限な生の肯定に向けられていることを論じられる (青木 2021: 25-27)。

第四に「出生性」について神学的な起源やメシアニズムとの関連に焦点を当てる論文も多い。「出生性」の概念が、アウグスティヌスやベンヤミンから受けた神学的・メシアニズム的影響に焦点を当てる議論もよく見られる。

(Biss 2012) では、アーレントの思想における「出生性」の全体的な機能が、「存在論的、政治的、『ひそかに』神学的、そして『目立たないように』メシアニズム的である」と様々に分類されてきた論争状況が整理されている (Biss 2012: 762)。(Vatter 2006) では、アーレントがアウグスティヌスを引き、「神が人間を創造したのは、始まりがもたらされるためである」という神の創造の文脈に「出生性」を関連づけていることに言及する (Vatter 2006: 138)。

このように、先行研究においては、「出生性」を単なる「新しい始まり」という政治的・比喩的な能力にとどめず、生政治への抵抗、フェミニズムの文脈における身体性の回復、死の哲学の超克、そして神学的な概念の世俗化といった多角的な視点から再解釈する傾向が強く見受けられる。以下、それらの諸解釈について、批判的な視点をも交えた検討を進めていく。

1. アーレントの「出生性」概念について

アーレントの政治思想における「出生性」は、彼女の著作全体を貫く核心的概念でありながら、アーレント自身がその定義や論理的帰結を断片的にしか語らなかったため、現代の研究者たちの間で激しい論争的となっている。アーレントは、アウグスティヌスの言葉「始まりがあらんために、人間が創造された (Initium ut esset, creatus est homo)」を (HC177, OT479, LM Vol.2: 18) を頻繁に引用し、人間が「死ぬべき存在 (mortals)」である以上に「生まれる存在 (natals)」であることを強調して (LM Vol.2: 109-110)、この「出生性」という事実の中に、新しい何かを始める能力、すなわち「自由」の根拠を求める。ここでアーレントの「出生性」について (伊藤 2026) に即して概観しておこう。

アーレントは『人間の条件』冒頭において、「人間本性」ではなく、人間の活動を理解するための「条件 (conditions)」を分析対象とすることを明言する。その文脈で「出生性」は、「可死性 (mortality)」と対をなす概念として導入される (HC8)。ここで重要なのは、「出生性」が個々の誕生の出来事そのものを指すのではなく、「生まれている存在であること」がもつ存在論的含意指している点である。

「誕生 (birth)」は、ある特定の人間が特定の時点で世界に生を受けたという、経験的、一回的出来事である。それに対して「出生性」は、その出来事が意味する存在論的条件、すなわち、人間が「始まり (beginning)」をもたらしうる存在として世界に現れているという事実を指す。「出生性」とは、人間の性質や能力、人格などではなく、人間がこの世界に現れてしまっているという取り消し不能な条件であり、人間がこの世界に現れ出る際の存在論的構造なのである。(伊藤 2026: 23)

ここで押さえておくべき事は、「出生性」が個々の誕生の出来事そのものではなく、生まれている存在であること」という存在論的構造を指しているということである。そのため、考えなければならない論点は、この「出生性」という存在論的構造がどのように「自由な活動」という政治的能力に転化するのかという論理的飛躍にある。

2. Totschnig の議論について

Totschnig は、これをアーレントの「出生性」をめぐる「難問」と呼ぶ (Totschnig 2017: 329)。Totschnig によれば、アーレントは出生を新しい始まりの「源泉 (source)」や「根 (root)」であると繰り返し主張するが、その接続の具体的な仕組みについては十分に説明していない (Totschnig 2017: 329)。アーレント自身、晩年の『精神の生活』において、「出生性」に関する議論が「どこか不透明 (somehow opaque)」であることを認めている (LM Vol.2: 217)。

多くの先行研究は「出生性」を単に「新しさを開始する能力」の隠喩として扱うが、Totschnig はこの解釈を批判する。「出生性」が単なる能力の別名であるならば、それは同語反復に過ぎず、アーレントがなぜあえて「生まれること」という条件的側面に固執したのかが説明できないからである。Totschnig は、「出生性」を「新来者 (newcomers) が人間関係の網の目の中に現れること」として再定義し、これが人間関係の網の目により構成される政治的領域を絶えず揺さぶり、変容させていると主張する (Totschnig 2017: 342-343)。彼の結論によれば、「出生性」は政治的領域が固定化し、安定した組織形態へと沈着し、新たな始まりの領域が失われることを防ぐ役割を果たす (Totschnig 2017: 344)。すなわち、新しい人間が生まれてくる限り、新来者は既存の関係の網の目の中に自分の場所を確保するために活動せざるを得ず、それによって他者にも応答 (活動) を強いるからである (Totschnig 2017: 344)。

しかし、この Totschnig の解釈は、「出生性」という出来事を極めて機能主義的・動態的なツールへと還元してしまっている。Demiryol が指摘するように、アーレントにとって「出生性」は単なる論理的な難問ではなく、全体主義という人間を余計なものにしてしまう体制に対する、還元不可能な「人間の条件」としての「安全装置 (safeguard)」であった (Demiryol 2023: 132)。Totschnig が試みた論理的洗練は、アーレントが直面していた全体主義の恐怖という、この概念の背後にある「暗闇」や「不可解さの核心」を、機能的な透明性の中に解消してしまう危険がある。

そして、Totschnig の議論において最も批判されるべきは、新来者である子どもが「既存の網の目の中に場所を築くために活動し、他者に活動を強いる」という、過度に能動的・攻撃的な新来者モデルである (Totschnig 2017: 344)。このモデルは、子ども、そして生まれ出たばかりの赤子が持つ根源的な「脆弱性 (vulnerability)」や「無力さ (helplessness)」を見落としている。

Söderbäck は、アドリアーナ・カヴァレーロの議論を引きつつ、アーレント (および彼女を継承する Totschnig 的な解釈) の「出生性」をめぐる議論が「奇妙なほど抽象的」であり、「身体を欠いた」ものであると批判する (Söderbäck 2020: 274)。Totschnig が描く新来者は、最初から政治的主体としての「活動」を開始する準備ができているかのように扱われているが、現実の誕生においては、赤子は他者の「ケア」と「愛」なしには存在することすらできない。この赤子のもつ徹底したある種の受動性が Totschnig の議論からは抜け落ちているのである。

Totschnig が主張するような「他者に活動を強いる」という力学的関係ではなく、新しい命を「迎え入れる」という受動性と能動性が交錯する「繊細な」空間こそが、「出生性」の真の舞台であると思われる。Totschnig の解釈は、Söderbäck の解釈を差し挟むとき、「出生性」とその現実化としての「誕生」を「活動のトリガー」へと矮小化することで、「誕生」が孕む倫理的な非対称性(産む者と産まれる者の関係)を無視していると言わざるを得ない。

Totschnig は、アーレントの枠組みに忠実に、生物学的な「第一の誕生」と政治的な「第二の誕生」を論理的に接続しようとするが、その接続は依然として「身体」を置き去りにしたままである。(Diprose & Ziarek 2019) では、アーレントが「労働する人間 (animal laborans)」の領域へと追いやった再生産の営みを、政治的生の根幹へと呼び戻すべきだ、と主張される (Diprose & Ziarek 2019: 207)。

Totschnig が「新来者の流入」を政治の維持条件として称賛する一方で、その流入を物理的に可能にしている女性の身体や再生産の権利 (中絶や生殖医療をめぐる政治など) に言及しないことは、現代的な視点からは極めて不十分である。Vatter は、「出生性」を「死の政治」に抗する「生の政治」(これは、フーコーの唱えた現代的な「生政治」とは区別される) の枠組み、すなわち「生そのものの自由」として捉え直し、全体主義が支配しようとした「生命過程」そのものの中に抵抗の拠点を求めようとした (Vatter 2006: 145)。Totschnig の「活動を強いる子供」という議論は、現代の生政治的な管理の対象となっている「具体的な生」の次元に届いておらず、結局のところ、アーレントの持つ「公私の厳格な分離」という側面を補強するだけに終わっているように思われる。

O'Byrne は、「出生性」を「シンコペーション的な時間性 (syncopated temporality)」として捉え、私たちが自分では経験できない「自分の過去 (誕生)」に規定されつつ、未来へと投げ出されている有限な存在であることを指摘する (O'Byrne 2010: 95)。また、Ferguson は、「出生性」が単なる「新しさ」の爆発ではなく、古い世界と伝統をいかに「相続 (inheritance)」し、再解釈するかという課題であることを強調する (Ferguson 2022: 130-131)。

Totschnig の解釈では、新来者は新しさの「供給源」(Totschnig 2017: 344) として機能的に扱われるあまり、彼らが「古い世界」という重荷をいかにして引き受けるのか、あるいは過去の世代との「複数性 (plurality)」をいかに紡ぐのかという、歴史的連続性の問題が軽視されている。「出生性」とは、単にシステムをかき回すための攪乱因子ではなく、世代を超えた世界への気遣いの連鎖の中に位置づけられるべき概念である (Demiryol 2023: 132-133)。

Totschnig は、「出生性」を「政治的領域の存続を保証する機能的必然性」としてクリアに説明したが、その「明晰さ」こそが、「出生性」が本来持っていた「謎 (enigma)」や「身体的重み」を削ぎ落としてしまったと言える。

「出生性」とその現実化である「誕生」は、Totschnig が言うような「他者に活動を強いる力」である以上に、ケアを必要とする圧倒的な脆弱性であり (Söderbäck)、現代の生政治的な支配に抗う身体の根源的な一回性であり (Vatter)、そして自分が作らなかった世界を相続するという倫理的責任の始まりである (Ferguson)。Totschnig の議論は、アーレントの論理的難問を解くための優れた補助線ではあるが、出生という出来事が持つ多層的な意味——特にフェミニズムや生政治が照射する現実の身体的・政治的闘争——を統合するには、あまりに「政治学的な」解釈に偏っている。「出生性」は、解かれるべき難問ではなく、私たちが「死を眼前に据える」のと同様に、いまだ名付け得ぬ可能性として、絶えず「生まれ直し」続けるための問いとして残されるべきである。Totschnig の解釈は「出生性」を人口動態的な「事実」に還元してしまい、個々の主体が内発的に「生まれ直す」という実存的なダイナミズムを弱めてしまう危険性がある。

3. フェミニズムの文脈での議論の問題点について

先に述べたとおり、アーレントの「出生性」概念に対し、Söderbäck は、カヴァレーロのフェミニズム哲学の視点から、アーレントの議論が「奇妙なほど抽象的」であり、問題があるほど脱身体化され、性的中立性を保っている、と批判する (Söderbäck 2018: 274)。しかし、アーレント自身の著作や他の研究者の議論に照らせば、Söderbäck の批判は、アーレントが「出生性」という概念によって守ろうとした政治的領域の固有性と、その「複数性」の論理を十分に汲み取っていない可能性がある。

Söderbäck は、アーレントが物理的な「誕生」の現場、特に母子間の非対称な関係を捨象していることを批判し、誕生を「ケアと愛の行為」を暴力から区別するための規範的概念として再構築しようとする (Söderbäck 2018: 274, 284-285)。しかし、アーレントにとっての「出生性」は、「誕生」という生物学的な「第一の誕生」そのものではなく、その存在論的条件であり、さらに言論と活動を通じて人間が世界に参入する「第二の誕生」を指し示す概念でもある (HC176-177)。

アーレントが誕生の身体的側面を敢えて前景化しなかったのは、政治を「生命過程の必然性 (労働)」から救い出すためであった (HC28-35)。もし「出生性」が Söderbäck の主張す

るように具体的な身体的ケアの関係に還元されるならば、政治的活動は「社会的」な配慮や必然性の論理に飲み込まれ、アーレントが最も警戒した政治の変質を招きかねない(HC126-135)。「出生性」という人間の「存在論的条件」の核心は「活動」を始動させる「始まり」をこの世界にもたらしうることであり、それを身体的ケアという私的な次元に再封じ込めることは、アーレントが意図した「新しさ」の根源的な予測不可能性を損なう恐れがある。

Söderbäck は、アーレントの「出生性」が「性的中立性」を保っていることを批判し、それが「身体を欠いた」抽象論に陥っていると論じる(Söderbäck 2018: 274)。これに対し、アーレントの「出生性」の抽象性こそが、全体主義に抗う起点になり得るという議論が存在する。

アーレントが身体的・性的差異を政治的議論から一旦括り出したのは、公的空間において個々人が生物学的な属性(何であるか)を超えて、自らの言論と活動によって「誰であるか(who)」を立ち上げる自由を確保するためであった(HC179, 181)。Söderbäck が求めるような身体性の導入は、個々の人間を再び「生物学的な種」や「特定のカテゴリー」へと固定化してしまう危険性を孕んでいる。Demiryol が強調するように、「出生性」は全体主義による「人間の余計なもの(superfluity)」化への対抗策であり(Demiryol 2023: 126)、その普遍的な政治的力は、まさに身体的属性に依存しない「複数性」の承認に立脚しているのである(HC 175-176)。

Söderbäck は、誕生の現場における「非対称な依存関係」を倫理の基礎に置くが(Söderbäck 2018: 284)、アーレントは政治的領域を「平等な者たちが集う場所」として構想した(HC175)。Söderbäck の議論は、依存とケアという非対称な関係を政治のモデルに持ち込むことで、アーレントが重視した「平等な他者との相互的な活動」という政治のダイナミズムを、救済やケアの論理へと変質させてしまう可能性がある。

Ferguson が指摘するように、「出生性」とは、自分が作らなかった世界に新来者として参入し、その世界を「引き受ける」という歴史的・世代的な責任を伴うものである(Ferguson 2022: 131)。Söderbäck の焦点が「産む者と産まれる者」の二者関係に留まっているのに対し、アーレントの「出生性」は常に「world (世界)」という第三の極を必要とする。Ferguson が論じるように、「出生性」は「過去(伝統)と未来(新しさ)」が交錯する場であり、その政治的意義は、単なるケアの関係を超えて、いかにして新しい世代が共通の世界を「相続」し、再構築するかという点にある(Ferguson 2022: 131-132)。

Söderbäck によるフェミニズム的批判は、アーレントが見落とした「再生産の身体性」という重要な論点を照射している。しかし、その批判は、アーレントが「出生性」を「生物学的プロセス」から「政治的条件」へと昇華させることで、いかなる属性にも還元されない個人の「創始、始める能力(initiative)」を守ろうとした意図を軽視している。「出生性」を「誕生」におけるケアの関係に引き戻すことは、政治の空間を「生」の必然性の中に再溶解させるリスクを伴う。「出生性」は、解かれるべき身体的な問題ではなく、私たちが身体的制約

を抱えつつも、いかにして自由な「誰」として世界に現れうるかという、アーレント的な政治の「奇跡」を担保するための不可欠な抽象化なのである (HC178)。

4. ハイデガー的な「死への存在」への批判として読み込む論文について

多くの論文は、「出生性」をハイデガー的な死への存在に対する「解毒剤」として捉え、現状を打破する「新しさ」や「革命」の能力として称賛する傾向にある (Demiryol 2023)。しかし、Ferguson が指摘するように、アーレントにおける「出生性」は単なる「新しさのための生得的な能力」ではなく、「過去と未来の間の還元不可能な対峙の場」を指している (Ferguson 2022: 119)。

よって、ハイデガー的な「死への存在 (Sein zum Tode)」への批判として読み込む際に、仮に伝統を単に「切断すべき対象」としてのみ扱っているならば、それはアーレントの意図を見誤っている。Ferguson によれば、アーレントは「repetition (反復) と revolution (革命)」を、人間の「出生性」を構成する不可分な要素として捉えていた (Ferguson 2022: 119-120)。「出生性」とは、自分が作らなかった「古い世界」に「見知らぬ者」として参入し、その世界を自らの課題として引き受ける「相続」の出来事でもある (Ferguson 2022: 131)。伝統の再構築を目指すのであれば、新しさによる切断だけでなく、その「古い世界」が持つ「不変の条件付けの力」をいかに肯定的に評価するかが問われなければならない (Ferguson 2022: 132)。

5. 「出生性」概念の背後にある神学的起源を探る論文について

アーレントの「出生性」概念の背後にある神学的起源 (特にアウグスティヌス) や、ベンヤミン経由のメシアニズムとの関連に焦点を当て、それを現代の政治的救済として論じる論文の試みは、アーレント思想の重層性を解明する上で重要である。しかし、こうした「神学的・メシアニズム的読解」には、アーレントが意図した政治の自律性を損ない、「出生性」を世俗的領域から切り離してしまうという大きなリスクが存在する。

Biss が指摘するように、「出生性」の機能はしばしば「存在論的、政治的、あるいは『隠れて』神学的、メシアニズム的」なものとして分類されてきた (Biss 2012: 762)。もし、「出生性」を単なるアウグスティヌスの「始原 (initium)」概念の世俗化された変奏としてのみ扱うならば、アーレントが「形而上学的思考とは区別された、政治的思考の中心のカテゴリー」として「出生性」を位置づけた意図を看過することになる (Ferguson 2022: 119)。

Ferguson は、アーレントの「出生性」には「聖書的」「生物学的」「言語と活動による第二の誕生」という三つの次元があることを強調している (Ferguson 2022: 122)。神学的起源を強調しすぎる論文は、このうち「第一の聖書的次元」に偏重し、アーレントが最も重視し

ぎ、人々の間で展開される活動という世俗的な次元を、超越的な論理の下に埋没させてしまう危険がある。

Demiryol が述べるように、「出生性」はしばしばベンヤミンのメシアニズムの残滓として読解される (Demiryol 2023: 124)。アーレント自身も、「出生性」を「世界を救う奇跡」と呼び、イエスの誕生に言及する (HC247)。しかし、神学的読解が陥りやすい罠は、この「奇跡」を外部からの神聖な介入として捉えてしまうことである。

アーレントにおいて「奇跡」とは、あくまで「人間が始める能力 (initiative) を持っている」という事実に基づく、世俗的な出来事である (Ferguson 2022: 122)。もし「出生性」をメシア的な「到来」を待機する受動的な姿勢に結びつけるならば、それはアーレントが全体主義への抵抗として構想した「自ら始める」という能動的なあり方を弱体化させることになる。

また、神学的・メシアニズム的な枠組みは、救済という普遍的な目的に向かうあまり、アーレントが固執した「複数性」や「身体的条件」を抽象化してしまう傾向がある。Söderbäck が批判するように、アーレントの「出生性」そのものが既に「脱身体化」の傾向を持つが (Söderbäck 2018: 274)、神学的解釈はこれをさらに加速させ、出生を物理的な「産む・産まれる」という非対称な関係から切り離された純粋な霊的事象へと昇華させてしまう (Söderbäck 2018: 274)。

また、Totschnig が論じる「新来者の絶えざる流入」という政治的・機能的側面は、神学的枠組みでは「世界の保全」という宗教的義務へと読み替えられがちである。しかし、アーレントにとっての救いとは、神による救済ではなく、新たな世代が「共通の世界」に参入し、自分たちの言葉で語り始めるという、極めて不安定で「予測不可能」な人間的営みの中にしかない。

よって、こうした論文について批判の眼目は以下の三点になるだろう。第一にアウグスティヌスやベンヤミンへの言及が、アーレントによる「政治の自律性」の確立という独自の企てを無効化していないか (Demiryol 2023: 124, Ferguson 2022: 119)。第二に「奇跡」としての出生が、具体的な「他者との間 (web of relationships)」で展開される「活動」ではなく、超越的な真理の現れへと変質していないか (Ferguson 2022: 122-123)。第三に、救済というトポスが、Söderbäck が求めるような「身体脆弱性」や、Totschnig の言う新たな始まりの領域が失われることを防ぐ役割を果たすしての新来者という現実的・世俗的な問いを覆い隠していないか (Söderbäck 2018: 274, Totschnig 2017: 345)。

アーレントの「出生性」を巡る議論は、神学的な言語を借りつつも、それを常に「この世 (this world)」の複数の生へと送り返すものである。その神学的起源のみを強調する論文は、アーレントが命がけで守ろうとした「世俗的な自由の空間」を、再び形而上学の牢獄へと閉じ込めることになりかねないのだ。

結論

以上を踏まえて、アーレントの「出生性」の議論にはどのようなポテンシャルティが考えられるだろうか。アーレントは、「出生性」を「新しい何かが始まる」という人間の根源的能力として位置づけた（HC8-9）。この概念が持つ最大の可能性は、政治的領域が固定化され、必然性の連鎖の中に埋没してしまうのを防ぐ機能にある（Totschnig 2017: 344）。新しい人間が絶えず世界に流入し続けるという事実は、既存の政治構造に常に「活動」を強いる刺激を与え、世界の沈着を防ぐ役割を果たすのだ（Totschnig 2017: 344）。

また、アーレントにおいて自由とは必然性を中断し、予測不可能な何かを開始することであり、出生という事実はその自由が人間に生得的に備わっていることを保証する（HC169, 177-178）。よって、「出生性」は自由の存在論的基礎としての側面も持つのだ。

次に、「出生性」は、人間を「余計なもの」として扱う全体主義的支配に対する、還元不可能な「人間の条件」としての可能性を持っている（Demiryol 2023）。どれほど完璧な抑圧体制であっても、新しい人間が生まれてくる限り、支配側が予期できない「新しい始まり」を根絶することはできない。出生は一人ひとりが唯一無二の「誰」として現れることを意味し、全体主義が抹殺しようとする「複数性」を物理的・存在論的に支え続ける（HC175-176）。つまり、「出生性」は「複数性」を根底で支えているのである。

さらに「出生性」は、単なる破壊的な新しさではなく、過去の世界をいかに引き継ぐかという「伝統と変革」の交錯点としての可能性を有している（Ferguson 2022: 119, 128）。「出生性」は、自分が作らなかった「古い世界」への参入、すなわち伝統という課題の相続として捉えられる（Ferguson 2022: 131-132）。これにより、過去を硬直した規範としてではなく、新世代が対峙し、再解釈すべき動的な対象として再構築することが可能となる（Ferguson 2022: 132-133）。

また、教育は新しい人間を古い世界に導入するプロセスであり、そこでは「世界への気遣い」に基づいた保守性と、新しい世代による変革の可能性が共存している（BPF177, Ferguson 2022: 135）。

さらに、「出生性」は、現代の生政治批判の拠点としての可能性を切り開いている（Vatter 2006, Diprose & Ziarek 2019）。「出生性」を「生そのものの自由」として捉え直すことで、全体主義が支配しようとした「生命過程」そのものの中に抵抗の拠点を求めることができる（Vatter 2006: 145）。アーレントが排除した「産む身体」や再生産の次元を政治的領域に接合することで、「出生性」を身体的媒介や多様な生を肯定する民主的な生の政治の基盤として拡張できる（Diprose & Ziarek 2019）。

さらには、「出生性」は、他者との関係性の中で自らを表出させる「複数性」の倫理的基盤としての可能性を持っている（Söderbäck 2018: 274, HC175）。「出生性」は「ユニークさの存在論」に根ざしており、それが他者との応答関係の中でのみ立ち上がる「誰」の現れであることが強調される（Söderbäck 2018: 274）。「出生性」とは新しい命を迎え入れる「世界へ

の気遣い」と繋がっていて、それは「赦し」や「約束」といった、他者との共生を可能にする具体的な活動へと繋がっている（伊藤 2026）。

アーレントの「出生性」概念は、政治的な「奇跡」を信じる希望の源泉であると同時に（HC178, BPF169）、現代の身体性、伝統、生政治をめぐる諸問題を解くための多義的で強力なツールとしての可能性を秘めている。それは、死を前提とする「有限性」の哲学を、「出生性」の現実化としての誕生から始まる「始まり」の哲学へと転換させることで、崩壊し続ける世界をその都度救い出すための実存的な指針となり得るのである（HC178, Ferguson 2022: 123）。

（本研究は、JSPS 科研費 JP23KJ1185 の助成を受けた。）

凡例

アーレントの著作からの引用は、引用文献表に掲げた略号とページ数を用いて、丸括弧の中に示した。例えば *The human condition* の 178 頁からの引用は、(HC178)と示した。

引用文献一覧

- 青木崇（2021）「赤子はどこへ生まれるか—可死性と出生性、ハイデガーとアーレント」『Arendt platz』6号、23-34頁。
- 伊藤孟（2026）「「共生の喜び」とは何か——アーレントの「出生性」に即して」『福音と世界』2026年3月号、22-27頁。
- 森川輝一（2010）『＜始まり＞のアーレント 「出生」の思想の誕生』岩波書店。
- Arendt, Hannah. *The Human Condition*. 2nd ed., Chicago: The University of Chicago Press, 2018[1958]. (HC)
- Arendt, Hannah. *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*. New and Enlarged Edition, New York: The Viking Press, 1968. (BPF)
- Arendt, Hannah. *The Origins of Totalitarianism*. New Edition, San Diego: Harvest Book, Harcourt Brace & Company, 1973. (OT)
- Arendt, Hannah. *The Life of the Mind*. One-volume Edition, Harcourt Inc., San Diego, 1978. (LM)
- Biss, Mavis.(2012) “Arendt and the Theological Significance of Natality”, *Philosophy Compass*. vol.7 no. 11, pp.762-771.
- Demiryol, Gaye İlhan.(2023) “That There Be a Beginning”Arendt and Natality”, *International Social Science and Art Studies*. vol.2 no.1, Near East University, pp.124-135.
- Diprose, Rosalyn; Ziarek, Ewa Plonowska (2019). *Natality and Biopolitics Toward Democratic*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

- Ferguson, Magnus (2022), “Natality and Tradition Reading Arendt with Habermas and Gadamer”, *Arendt Studies*. vol.6, pp. 119-138.
- Jay, Martin. (1985) *Permanent Exiles*. New York: Columbia University Press.
- O'Byrne, Anne Elizabeth (2010) *Natality and Finitude*. Bloomington: Indiana University Press.
- Söderbäck, Fanny. (2020)“Natality or Birth? Arendt and Cavarero on the Human Condition of Being Born”, *Hypatia*. vol.33 no.2, pp.273-288.
- Totschnig, Wolfhart (2017) “Arendt’s notion of natality An attempt at clarification”, *Ideas y Valores*. vol. LXVI, no. 165, pp. 327-346.
- Vatter, Miguel.(2006) “Natality and Biopolitics in Hannah Arendt”, *Revista de ciencia política*, vol.26, no.2, pp.137-159.